

自分の思いや考えを豊かに表現できる児童の育成 ～文集『ひざし』を活用した授業実践を通して～

1. 設定理由

本地域の児童には、書くことが苦手で、語彙が少なく、感情や様子を表現する言葉の使い方が拙いといった共通する実態があった。そこで、ひざしプロジェクトを立ち上げ、「児童と共に学び合うための文集」として文集『ひざし』を活用し、児童の書く意欲や技能を育て、豊かに表現できる児童を育成したいと考え、本主題を設定した。

文集『ひざし』は、今年で70号の歴史をもつ印旛地域子ども文集であり、この地域に暮らしてきた祖父母の世代にまで遡る、連綿と続く価値をもっている文集である。

2. 研究仮説

①日常的に言語活動の工夫を行うことで、「書こうとする力」が育ち、進んで表現しようとする態度が養われるだろう。

②文集『ひざし』を教材として活用することで、「書くことができる力」が育ち、表現力が高まるだろう。

3. 研究内容

①日常的な言語活動にとりくむことで、児童の書く活動への抵抗感を少なくし、「書こうとする力」＝書こうとする意欲面を育てる。

②文集『ひざし』を活用した授業を行うことで、児童の思いや考えをよりよく伝える表現力を高め、「書くことができる力」＝書く技能面を育てる。

4. 結 論

○日常的に様々な言語活動を行うことで、児童の書く活動への抵抗感が少なくなった。その結果、書きたいという意欲が高まり、自分の思いや考えを進んで表現できるようになった。

○文集『ひざし』を教材として活用することで、今まで知らなかった表現や言葉を知ることができ、「光る言葉」として自分の作品に活かすことができるようになった。感情や様子を表現する言葉の幅が広がり、自分の思いをのびのびと表現できるようになった。

○自分たちの作品を友だちどうしで推敲するなどの交流活動を通して、より自分の思いが伝わるような表現を選択することができるようになった。

印旛支部

印西市立牧の原小学校

杉本 あゆみ

佐倉市立小竹小学校

松 井 亮

1 研究主題

自分の思いや考えを豊かに表現できる児童の育成
～文集『ひざし』を活用した授業実践を通して～

2 主題設定の理由

(1) 今日の課題から

子どもたちを取り巻く言語環境は、インターネットやSNS、各種情報ツールの発展にともない、多様化、複雑化している。それは、短文や単語、記号のやりとりだけでコミュニケーションを行ったり、人と人とのつながりが希薄になりがちな、インターネット上でのコミュニティーが低年齢層にも拡大していったりと、児童の日常的なコミュニケーション能力の現状ともつながる課題となっている。これからの予測が困難な時代を生きていく児童には、国語を通じて、言葉から様々なことを感じたり、感じたことを言葉にすることで心を豊かにし、つかう言葉が醸し出す味わいを感覚的に捉え、学びを人生や社会に生かそうとする「主体的・対話的で深い学び」が求められている。そこで、主題に設定した「自分の思いや考えを豊かに表現できる児童の育成」をめざした実践を行うことで、子ども自らが「言葉による見方・考え方」を働かせる学びの場を生み出す、授業改善のとりくみとしていきたい。

(2) 学習指導要領から

国語科の目標は「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」である。「書く力」は、「表現する力」や「伝え合う力」、「思考力や想像力」などによって形成される。国語科では、付けたい力を明確にし、様々な言語活動を通して児童の能力を育成することが重視されている。本主題は、言語活動において文集『ひざし』を活用した授業実践を行うことで、児童の「表現する力」の育成を図ることができると考え、設定した。

(3) 印旛地域の児童の実態から

昨年度より、文集『ひざし』を支えてきた先人たちの考え方を受け継ぎ、「児童と共に学び合うための文集」としての価値を再認識するべく、「ひざしプロジェクト」が立ち上げられ、印旛管内の小・中学校において実践を行ってきた。

児童の実態として、ひざしプロジェクト（小学校）では、「書くこと」のとりくみについて、昨年度より視写や5分間日記・作文などの日常的な言語活動を行ってきたことで、児童の書く意欲は高まっており、「書くこと」が好きな児童が多い。その反面、自分の思いや考えを、表現を工夫して書くことや、相手に伝わるように文章の構成を考えて書くことが苦手な児童も少なくない。また、語彙の少なさや、感情や様子を表現する言葉の幅が狭いことも挙げられる。これらを踏まえて、文集『ひざし』を活用しながら、作文や詩を書く言語活動へのとりくみを通して、「自分の思いや考えを豊かに表現できる児童の育成」をめざし、研究主題を設定した。

3 研究主題について

(1) 自分の思いや考えを豊かに表現できるとは

児童は、学習や日常生活における人との関わりの中で様々なことを思い、自分の考えを形成したり新しい考えを生み出したりしている。それを互いの立場や考え方を尊重しながら、言語を通して豊かに表現する力を高めていきたい。**自分の思いや考えを豊かに表現できるとは**、自分の考えを形成したり、言葉から様々なことを感じたりし、言葉を手がかりにして、より自分の思いや考えが伝わる表現で表すことをできるようになった姿ととらえている。

児童に自分の思いや考えを相手に伝えたいという気持ちがあったとしても、それを適切に表現できなければ相手には伝わらない。自分の考えを豊かに表現するためには、言葉の特徴や使い方、情報の扱い方、我が国の言語文化に関する「知識及び技能」が必要になる。新学習指導要領では、語彙を豊かにする指導の改善・充実が重要視されている。語彙を豊かにするとは、自分の語彙を量と質の両面から充実させることである。意味理解している語句の数を増やすだけでなく、語や文章の中で使いこなせる語句を増やすとともに語句と語句との関係、語句の構成や変化などへの理解を通して、語句の意味や使い方に対する認識を深め、語彙の質を高めることである。話したり聞いたり書いたり読んだりする具体的な言語活動の中で、相手、目的や意図、場面や状況などに応じて、どのような言葉を選んで表現するのが適切であるかを判断したり、言葉が醸し出す味わいを感覚的に捉えたりする言語感覚を養うことは、一人ひとりの児童の言語活動を充実させ、自分なりのものの見方や考え方を形成することに役立つ。また、友だちと対話していくことによって自分の語彙を量と質の両面から充実させる。そうした活動を繰り返していくことで児童は、**自分の思いや考えを豊かに表現できると考える**。そのような資質・能力を育成することを本研究でめざす。

(2) なぜ文集『ひざし』を授業に活用するのか

作品が自分と共通する身近な題材で書かれていたり、自分と同じような経験が等身大の言葉で表現されていたり、児童にとって共感できる内容や題材が豊富である。地域に暮らしている同世代・同学年の仲間たちがどんなことを思い、どんな生活をしているかを互いに知り共有できる。また、すべての小中学校が文集『ひざし』に作品を応募し、自分たちが書いた作文や詩が掲載されることもよさである。そのことが児童のよりよい作品を書こうとする意欲へとつながっている。児童の近くに代々の文集を並べることで並行読書ができ、作品どうしを比べながら常によりよい作品から学ぶことができる。そして、作品の中から授業で教材として扱う作品を選び、分析をしたり表現の工夫について学んだりしていくことは有効な手立てだと考えられる。

4 研究仮説について

仮説①日常的に言語活動の工夫を行うことで、「書こうとする力」が育ち、進んで表現しようとする態度が養われるだろう。

○「書こうとする力」とは、児童が書きたい、書いてみたいと思う意欲のことである。

○進んで表現しようとする態度とは、自分の思いや考えを自分の言葉で意欲的に書こうとする態度である。

〈学校での言語活動〉

5分間日記・作文 限られた時間の中で、できるだけ詳しく書いたり、伝えたいことを端的に表現したりするなど、日常的に書く活動を取り入れていく。また、教員による前向きなコメントや返事をつけることによって、「書こうとする力」を伸ばしていくことができる。

日直による詩の発表 発表する詩を自分で選ぶため、自然と詩集に手が伸び、たくさんの作品を読み、表現力を身に付けることができる。

ポエムレストラン 聞いてもらうために自分の詩を書きたいという気持ちが高まり、進んで「書こうとする力」を伸ばすことができる。

並行読書 学習に必要な表現力や書き方を知ることができる。

読書や授業後の感想 短い言葉で自分の考えや思いを書くことができる。さらに、感想に対して教員や友だちからの返事をもらうことで、書きたいという気持ちを高めることができる。

＜家庭学習での言語活動＞

視写 毎日続けることで、文字を書くことや文章の構成の仕方に慣れていくことができる。

週末の日記・作文・詩 書いた作品を学級だよりに掲載することで、読んでもらえる喜びを知り、「書こうとする力」を伸ばすことができる。

仮説②文集『ひざし』を教材として活用することで、「書くことができる力」が育ち、表現力が高まるだろう。

○「書くことができる力」が育ち、表現力が高まるとは、文章を書く技能が育ち、自分の思いや考えをよりよく表現することができるようになることである。

＜ひざしの活用の仕方＞

文集『ひざし』コーナーを作り、いつでも優れた作文や詩を読めるようにする。

①題材の選定 ・印象に残った題材や自分に合った題材を抜き出して友だちとの意見交換を通して検討したり、日々感じたことを「作文の種」として書き留め袋にためていき、自分の題材選びの参考にさせる。

②構成の工夫 ・文集『ひざし』からモデル文を提示し、その作品について分析し、作者が伝えたいことは何かを考えさせ、そのためにどのような文章の構成になっているかを確認させる。
・自分の書こうとする作文のメモについて、伝えたいことの中心がはっきりするように段落の並び替えを行わせる。

③表現の工夫 ・作品を視写したり読んだりすることで、語彙の量を増やしたり、優れた文章表現「光る言葉」に気づかせる。「この表現はこういう感情と結びついている」ということを考えさせ、抜き出したものを「光る言葉の木」として教室内に掲示する。掲示してあるものを自分の作品に取り入れたり、自分の表現したいことを相手に伝えるためにはどう表現したらよいのかを考えて自分なりの表現を使ったりできるようにする。

※「光る言葉」とは、読み手に様子や気持ちがより伝わるようになに書かれた、その子なりの工夫された書き方である。便宜上「光る言葉」としたが、言葉だけでなく文章表現（効果的な会話文の使い方、体言止めや比喩表現、擬態語、動作など）についても「光る言葉」として取り上げた。

④推敲の仕方 ・「光る言葉」が入っていないモデル文について、「光る言葉」を使って手直しする。
・自分が書いた作文について「光る言葉」を使って手直しする。

全ての過程において言葉や文章に対する感想や意見を伝え合う交流の場を設ける。互いの文章の内容や表現のよいところを見つけたり、さらによりよい表現を探究できるようにする。

5 実践

仮説1 日常的な言語活動の工夫

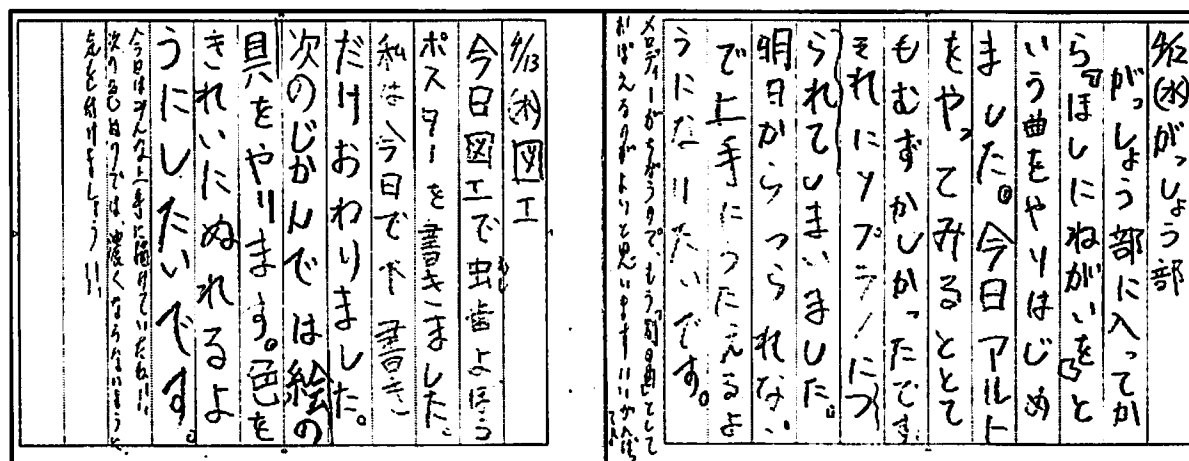
○ポエムレストランの開催（資料編 P.1 参照）

ポエムレストランとは、聞き手であるお客さんが詩を注文し、発表者は料理人として自分の詩を紹介するという活動である。2学年にとっては初めての活動であったが、児童はとても楽しそうに活動することができていた。楽しいだけでなく、相手意識を持って読むことで、読み方にも工夫が見られた。そして、自分の作った詩をたくさんの人に聞いて欲しいという思いから、書こうとする力の高まりが見られた。

3学年は、昨年度からとりくんでおりこれまでに4回経験している。日直が詩を書き、帰りの会で発表し、それをためていき学期末にお客さんを招待して「ポエムレストラン」を開いている。発表する詩は、詩集から選んでもよいし、自分で作ってもよい。回を重ねるにつれて自分で詩を作る児童が増え、休み時間にも進んで作る姿が見られた。

○5分間日記・作文

掃除後の5分間に書くことが習慣づいた。書けた行数を競わせる他、会話文を入れたり、光る言葉を入れたりすることを勧めてきた。児童は、「楽しかったことを思い出せる」「先生に伝えてコメントをもらえる」などの思いを持ちながら、楽しんで書いている。



5分間日記・作文などの日常的な言語活動では、文章の訂正や褒めたり励ましたりする指導・支援を行っている。生活指導と表現指導の二つの側面を兼ねており、自己肯定感の向上や児童理解にも役立っている。

○学級だよりを活用した作文指導（資料編 P.2 参照）

4学年は、児童の言葉や活動の様子、作文や詩を中心とした学級だより『たいよう』を毎週発行している。週末にとりくんでいる作文や詩の中からこの学級だよりに掲載していく。学級だよりに掲載されることで、担任からコメントをもらえたり、友だちや保護者に注目して読んでもらえたりすることから、児童は意欲的に「書くこと」にとりくんでいる。担任のコメントは、意図的に示唆を与えるものや、言葉で生活を指導するものとなるように心掛けた。それがまた、次の作文に生かされるようになってきた。7月には、題材が豊富になり、伝えたいことが端的に書けるようになってきた。継続的な言語環境の耕しが、児童の「書こうとする力」を育て、「書くこと」に対する抵抗感を減らしていると感じている。

①題材の選定

<3 年生の実践> (資料編 P.10 参照)

①「作文のたね」を袋にためる

4 月中旬に教科書教材に「発見ノート」の学習がある。日常生活で関心をもったことを紙に書き留めるという内容である。この時に一人ひとりが「作文のたね」の袋を作り、ためていくことにした。この時点ではまだ起承転結を考えなくてよい。学習前の実態調査で、「題材が思いつかない」と答えていた F 児、N 児は、「作文のたね」を何枚も書きため、学習後の調査で「作文のたねが見つけれられたから今回の学習が楽しかった」と答えている。日常生活の中で題材を見つける意識を高めるために有効な手立てだといえる。

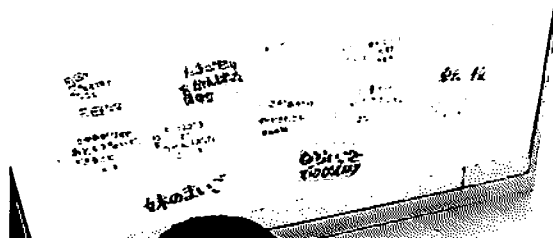
②文集『ひざし』を題材選びのヒントとして使う

6 月までに書きためた「作文のたね」の中から題材を選ぶ段階で文集『ひざし』を活用した。よい作品を読むことで児童は、作文を通して伝えたいことがあり、さらに心の動きがある題材を選ばなくては「中」の部分を膨らませたよい作品にならないということを実感し、自分にとってそのような題材は何なのかを慎重に考えていた。文集『ひざし』には、どのような題材の作品が載っているのかを探す姿もたくさん見られた。全体でも起承転結がはっきりとした作品をいくつか取り上げて考え、文集『ひざし』から見つけた起承転結がはっきりとした題材や、自分が考えた題材を「作文のたねの家」に掲示してみんなが参考にできるようにした。F 児は、書きためた「作文のたね」の中から一番自分の心が動いた題材を選ぶことができた。

<交流活動>

○第3 学年

自分が選んだ題材について、グループの友達に「心の動き」と「伝えたいこと」を話してアドバイスをもらった。なかなか決められない児童について休み時間に一緒に考えてあげる姿も見られた。



<ひざしの活用>

○第3 学年

いつでも文集『ひざし』を読めるように教室の近くに「ひざしコーナー」を作った。

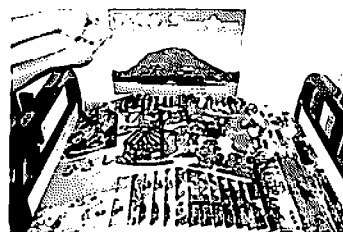


○第4 学年

「心が動いた場面」を題材設定の条件として、書きためてきた作文や、新たに考えたアイデアからノートに書き出した。グループで内容を伝え合うことで、児童は書きたい題材や書けそうな題材を選ぶことができた。

○第4 学年

児童は文集『ひざし』が大好きで、多様な題材の作品にふれることが、題材を選ぶ際の、考えの幅の広がりにつながった。



③表現の工夫

<全学年共通>

○光る言葉の木（資料編 P.4 参照）

文集『ひざし』の作品分析を行う際に、「光る言葉」集めを行った。作文の中から、児童が「この言葉や表現が光っている」と感じたものを書き出し、その中から語彙として使えるようにしたい言葉や、比喻などの表現技法を付箋に書き出し、教室内の「光る言葉の木」の掲示物に貼り付けて、いつでも見に行けるようにした。児童は自分の情報カードや組み立て表を書く時に、光る言葉をそのまま取り入れたり、表現技法を真似て使ったりすることで、表現の幅を広げることができた。また、「光る言葉」集めは文集『ひざし』の作品だけではなく、日常的なとりくみでも行っている、児童の5分間作文の中からも選りすぐって掲示した。そのこともあり、児童は書く活動の中で、進んで「光る言葉」を使おうと工夫するようになってきた。

<交流活動>（資料編 P.12・19 参照）

組み立て表をもとにした意見交換では、「光る言葉」が思い浮かばない児童に、「ここでこんな言葉を使うといいよ」などとアドバイスすることができていた。また、「心が動いた場面」がぼやけてしまっている児童には、理由を説明して、より気持ちが伝わる構成や内容を具体的に伝えることで、「書きたいこと」と「書いて欲しいこと」が一致し、意見を共有することができた。

<ひざしの活用>

- 文集『ひざし』の作品を、「光る言葉」を見つける視点で読む。
 - 「光る言葉」の効果や、感じ方の違い、言葉の意味について、正しく理解する。
 - 自分の作品の中に、「光る言葉」を取り入れて使おうとする視点で書く。
 - 書き出しや終末の工夫について知り、表現の選択肢を増やす。
- 教材としての価値を発見することができた。

<3年生>

学習後の調査を見ると、今回の作文の学習を全員が楽しかったと答えており、「友だちと相談し、直しながら書けたから」という理由を挙げている児童が16人もいることから、書いていく途中で相談タイムを設け、お互いの作文に対してアドバイスし合うことは、楽しく有効な活動であったとわかる。毎時間の交流活動の中で、友だちの作品を読み返し、様子が浮かばないことについてどんどん質問し、質問された児童はそれを書き加えていった。B児やI児、Q児、S児は、自分一人で書き進められないが、友だちに質問してもらうことで書き進めることができ、楽しそうであった。

アドバイスをされ、様子を詳しく書き直している。

【ふとんほしになりながら、回っている。】



【手が黄色になって、赤になって、じいんとする。手にあせをかけた。】

様子が詳しくなるように付け足した方がよい文章を、アドバイスされて書き直している。



授業中は、「光る言葉の木」を見に行き参考になっている。

④推敲の仕方

< 3年生の実践 > (資料編 P.13 参照)

①「光る言葉」が入っていないモデル文について「光る言葉」を使って手直しする

②自分が書いた作文について「光る言葉」を使って手直しする

モデル文について「光る言葉」を使って手直した次の時間に、自分たちが書いた作文について最後の手直しをした。モデル文の時には、「すごく」や「必死に」などを書き加えるだけであった F 児と N 児も自分の作文の中に1つ使うことができ、最終的に全員が「光る言葉」を使って作文を書き上げることができた。

< 交流活動 >

両活動とも個→グループ→全体で考えた。個人で考える過程でほぼ全員が「光る言葉」を使って手直しできた。グループでの話し合いでは、同じ箇所について直した「光る言葉」について、どちらがより気持ちや様子が伝わるかを話し合っていた。全体で全部のグループの考えを比較する中で、動作や様子で気持ちを表すと生き生きとした表現になり、自分の伝えたいことが伝わるということに気づくことができた。

< ひざしの活用 >

・「光る言葉の木」から自分が表現したいことに合うものを探したり、そこからはぴったりと合う表現が見つからずに文集『ひざし』を読み直して探したりしていた。

さらに、文集「ひざし」からではなく、自分なりの表現を考える児童も増えた。

< 4年生の実践 > (資料編 P.20 参照)

○下書きを文集用の原稿用紙に書き、推敲する

単元の学習に先立ち、文の直し方を学習した。下書きを訂正する際、学習した直し方で書き込んでいった。推敲の流れは、「①自分で読み返し、漢字や言葉の誤りを訂正する。②友だちに読んでもらい、表現がわかりにくい場面を訂正する。③担任が読み、①②で漏れている誤りを指摘したり、文章の加除を求めたりする。④家庭に持ち帰り、保護者に下書きの音読を聞いてもらい、アドバイスを受ける。」と、多くの人が関わる中で進めていった。

授業時間だけではなく休み時間にも、児童は「どっちの表現の方がいいか」「この文の後にどの文をつなげたらいいか」「こんなふうに書いたがどうか」など、迷っている部分を積極的に相談しにきていた。担任はアドバイスや例は示すが、児童は自分が納得した上で推敲を行っていた。対話の中でよりよい表現を考え、作品を高めることができた。

< 交流活動 >

推敲では、友だちに読んでもらい、意見交換する活動を行った。単に意見を伝え合うだけではなく、「なぜその表現なのか」と、考えを共有することで、自分の作品をよりよくしようとする視点で行った。これは、担任や保護者との推敲でも同様で、多くの人と関わりながら、対話的に作品づくりを進めることを重視したことで、質を高めることができた。

< ひざしの活用 >

・組み立て表から下書きを書く時にも、文集『ひざし』を机上に用意し、表現や書き方の参考資料とした。



2学期教材の「みじかい言葉」でと1学期教材の「探検したことを伝えよう」の単元入れ替えをして行った。そして、布鎌小『のはらうた』を作るという言語活動を設定した。

文集『ひざし』から、2年生が書いた詩2点をモデルとして紹介した。モデルの詩を読み、全員で「光る言葉」の定義を話し合った。今回は、音で表す言葉と喩えて表す言葉を「光る言葉」とした。文集『ひざし』には、同学年の作品が載っており、親近感を持ちながら読み進めることができた。中には、自分の作品を書いてみたいという児童も出てきた。また、「光る言葉」探しという読む視点が明確化されていたため、読むことが苦手な児童も進んで読む姿が見られた。

○「光る言葉」の木の掲示・活用

文集『ひざし』から見つけた「光る言葉」を「光る言葉の木」として、掲示した。比喩表現の木と擬音語の木の2種類の木に分けた。このころから、生活科の野菜の観察カードや絵日記などに、比喩表現や擬音語を使い始める児童が見られた。

そして、3時間目の授業では、教員が作成した「光る言葉」が入っていない詩を提示し、グループごとにモデルの詩に合う「光る言葉」を付け加えた。どこに「光る言葉」を書き加えるか迷うグループはなく、「光る言葉の木」に集まり、詩に合う「光る言葉」を見つけ出していた。中には、「光る言葉」を自分たちで考えているグループもあった。5グループで活動したが、どのグループも様々な「光る言葉」を付け加え、個性豊かな詩ができあがった。このように日頃から文集『ひざし』を読むことで自然と詩の特徴や詩に合う言葉を見つけ出す力がついていった。

○交流の場の設定

学習のまとめとして、マイのはらうたを作り、友だちどうして推敲をした。初めて詩を書いたので、文が長くなりすぎてしまったり、「光る言葉」が入っていなかったりする詩が見られた。そこで、グループごとにもっとよい詩にするにはどうしたらよいか話し合った。Aグループでは最初、「光る言葉」が全く入っていなかった。そこでグループの話し合いでは、音の「光る言葉」を入れた方がよいという声が聞こえてきた。話し合い後に完成した作品には、ザラザラやペタペタなどの「光る言葉」が付け加えられた。次にBグループでは、パタパタやきらきらなどの「光る言葉」は入っていたので、比喩表現の「光る言葉」を入れようと話し合っていた。完成した詩には、「ふうせんみたいに」や「ダイヤモンドみたいで」という「光る言葉」が付け加えられた。

この実践を通して、児童の語彙力の広がりを感じた。

☆中学校での実践

中学校でも文集『ひざし』を活用した実践を行った。中学校では、文集『ひざし』で使われている感情表現を分析する活動を行った。グループごとに分析したものを「表現辞典」としてノートにまとめ、自分たちの作文を書く際に活用した。やはり、中学校においても文集『ひざし』の作品を読み、さらに分析を行うことで、生徒の表現方法に広がりが見られた。

6 成果と課題

<仮説1>

- 日常的に様々な言語活動を行うことにより、児童の書く活動への抵抗が低くなった。その結果、自分の思いや考えを生き生きと表現できるようになった。
- 日常的に書く活動を取り入れたことで、作文学習の際にも抵抗なく、書きたいという意欲が高まり、とりくめるようになった。

<仮説2>

- 文集『ひざし』には自分と等身大の作品が載っているので、親近感をもちながら進んで読むことができた。たくさんの優れた作品に触れることができた。
- 詩や作文を書く過程で交流活動を積極的に取り入れたことにより、学び合いの質が高まった。学習において個別な支援が必要な児童も自信を持って楽しく学習することができた。
- 文集『ひざし』を教材として活用することで、今まで知らなかった表現や言葉を知ることができ、「光る言葉」として自分の作品に活かすことができた。感情や様子を表現する言葉の幅が広がり、自分の思いをのびのびと表現することができた。
- 自分達の作品を友だちどうしで推敲するなどの交流活動を通して、より自分の思いが伝わるような表現を選択することができた。さらに、交流の視点や観点を児童にしっかりと理解させ、交流の質を高めていきたい。

本研究を通して、地域文集『ひざし』の教材的価値を再認識することができた。今後はさらに有効な指導の仕方について研究していきたい。

印旛地域子ども文集『ひざし』の価値

戦後の生活綴り方運動は、昭和25年「日本綴方の会」が誕生して再開された。翌年「日本作文の会」と改称し、この会を中心に活発な活動を展開しながら今日に及んでいる。

『ひざし』の発刊は昭和22年であり、当時の印旛の国語教育に携わる教員の多くが、戦後いち早く、子ども達の将来のために、ものの考え方・感じ方・生き方を育て、文章力を高める作文教育を重視していたことが分かる。当時から『ひざし』は、政治的思想を越えて、子ども達が共に学び合うための文集であり、成長を共に促す教育資源となっている。さらに、印旛地区の子ども文化、教育文化の足跡と言っても過言ではないだろう。

戦後、多くの団体で作文指導が重要視されているが、これほど長い歴史を持つ文集は他にない。発行号数が多い柏市『かつしか』横浜市『よこはま』などは、日本作文の会が出来てからの創刊であろう。藤沢市の小学校文集『わかふじ』も昭和26年、中学校文集『砂丘』は昭和24年創刊である。生活綴り方が盛んであった東北に目をやると弘前市の『ひろさき』は、昭和37年頃の創刊である。もちろん、これ以外に小さな団体の文集は、他にもあるかもしれないが、地域の小中学校で作品を集め、地区の教職員がボランティア体制で支え続けている編集文集は他にないだろう。昭和22年度創刊、平成27年度で第68号という実績は、日本国語教育界において、きわめて偉大な軌跡である。この事実を印旛教育に携わる我々がしっかりと受け継ぎ、後世に引き継いでいきたいと考えるのである。

< 仮説 1 の実践 >

○ポエムレストランの開催

ポエムレストランの流れ



①メニュー表から詩を選んでもらう。



②ウェイトレス役の児童が注文を受ける。



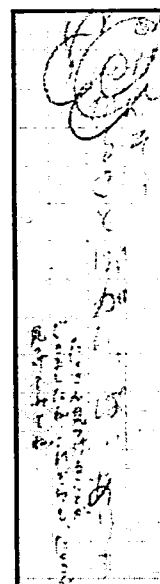
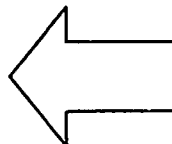
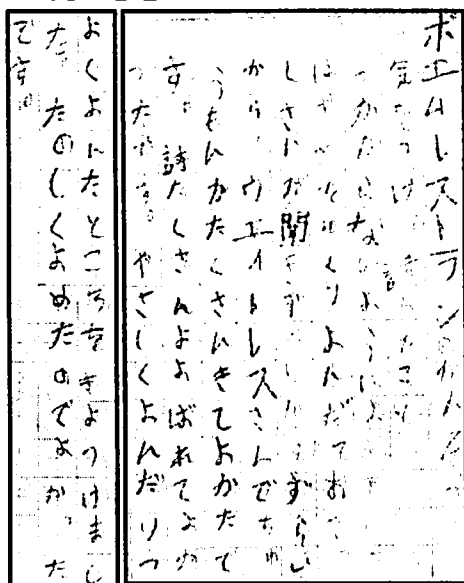
③注文を受けた料理人役が詩を発表する。



④お客さんから感想（お代）をもらう。

A 児は書くことがとても苦手である。これまで授業での感想はひと言しか書くことができなかった。しかし、ポエムレストランについての感想は夢中で書く姿が見られた。内容も読むときに気をつけたことが書いてあり、相手意識をしっかりとって学習できたことがわかる。またポエムレストランがやりたいと学習に対しての意欲が高くなった。

< A 児の感想 >



○学級だよりを活用した作文指導

- ・昨年度の4月当初、第1号ではまずは何でもよいので書いてきてもらい、「書くこと」の楽しさに気づいていけるようにした。(毎週B4用紙、1.5～2枚程度を発行)
- ・児童は『たいよう』を楽しみにしており、作品を書くことや読むことを心待ちにしている。このことから、児童の「書こうとする力」が育っていることがわかる。

[illegible]

- ・夏休み明け、9月の『たいよう』。読売新聞社主催の全国小・中学生作文コンクールに出品するため、夏休み中にとりくんだ作文も掲載した。1学期に文集『ひざし』を活用した長文を書く実践にとりくんだことで、児童の「書くことができる力」の成長も実感できた。

< 仮説 2 の実践 >

第 2 学年実践（詩） 児童数 15 人

1 単元名

みじかい言葉で

～布鎌小 『のはらうた』 をつくろう～

2 単元の目標

【関心・意欲・態度】

- ・生きものになりきり、短い言葉で表現しようとする。

【書くこと】

- ・生きものの特徴をつかみ、様子が伝わるような言葉を集め、短い文章を書くことができる。
- ・自分で作った詩やお気に入りの詩を紹介することができる。

【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】

- ・ものの様子や形などの特徴を捉えて表現できる。

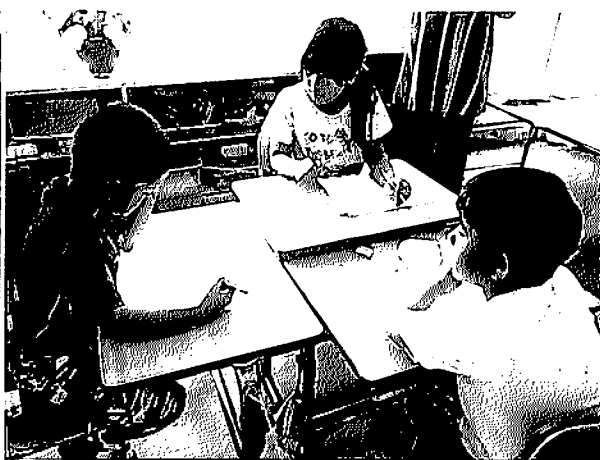
3 指導計画 6 時間扱い 実施時期 6 月

	学習内容と学習活動
第 一 次 (1)	○学習計画を立て、見通しをもつ。 ・『のはらうた』の作品を読む。 ・詩の特徴について話し合う。 ・学習の流れを知る。 ○「光る言葉」の見つけ方を知る。 ・「光る言葉」とは、擬音語や擬態語・比喻表現などであることを知る。
常時	○「ひざし」を読み、「光る言葉」を見つけ、掲示していく。 ○『のはらうた』を読み、気に入った詩を紹介する。
第 二 次 (3)	○ポエムレストランを開く。 ・『のはらうた』から選んだ自分のお気に入りの詩を紹介する。 ○よりよい詩にするにはどうしたらよいか話し合う。 ・例示された詩に「光る言葉」を書き加え、それぞれの詩のよさについて話し合う。 ○自分の『のはらうた』を書こう。 ・なりたい生きものを決め、自分の『のはらうた』を書く。
第 三 次 (1)	○ポエムレストランを開く。 ・自分たちがつくった『のはらうた』を紹介する。

[illegible]

○本時では、教師が作成した「光る言葉」が入っていない詩を提示し、各グループで「光る言葉の木」を使って、「光る言葉」を付け加えた。どこに「光る言葉」を書き加えるか迷うグループはなく、「光る言葉の木」に集まり、詩に合う「光る言葉」を見つけだしていた。グループによっては、自分たちで考えた「光る言葉」を付け加えている姿も見られた。学習の最後には、各グループが作った詩を発表した。最初の詩と比べて聞くことができ、どの児童の感想からも、「光る言葉」がある詩の方がよいと感じていることがわかった。今回は5グループで活動したが、どのグループもいろいろな「光る言葉」を付け加え、個性豊かな詩ができあがった。

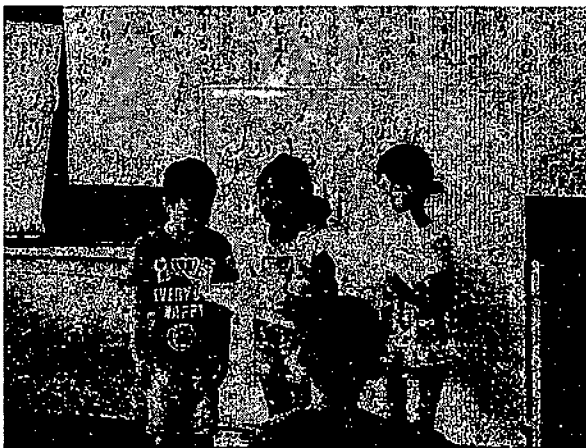
A high-contrast, black and white photograph of a crowded classroom. Students are seated at desks, some writing, some looking towards the camera. The image is grainy and has a stark, almost graphic quality.



<各グループで「光る言葉」をどこに付け加えるか話し合う>



<できあがった作品をグループごとに発表>



○児童の感想からは、「光る言葉」がある詩とない詩では、感じ方が違うことに気づいたことが書かれていた。そして、自分たちが書く詩にも「光る言葉」を入れていきたいという「書くこうとする力」が育っていることがわかる。

<各グループが作った詩>

おれのじまん それは、このはさみだ えものがまた つがえるのさ ういなる おれのじまん それは、このはさみだ えものがまた つがえるのさ ういなる	おれのじまん それは、このはさみだ えものがまた つがえるのさ ういなる おれのじまん それは、このはさみだ えものがまた つがえるのさ ういなる
--	--

手立て⑤マイのはらうたを作り、友だち同士で推敲する

○これまで、『のはらうた』や文集『ひざし』をたくさん読んできたが、実際に詩を書くとなると苦手な児童が出てきたり、事実の羅列になってしまったりするだろうと考えた。そこで書いた詩をグループごとに見合い、「光る言葉」が入っているか、どこの言葉を短くすればよいかを話し合う時間を設定した。最初は「光る言葉」が入っていなかった詩も、みんなで考えた「光る言葉」を入れることでよりよい『のはらうた』を完成することができた。

<「のはらうた」づくり>

Aの作品 題材：トカゲ

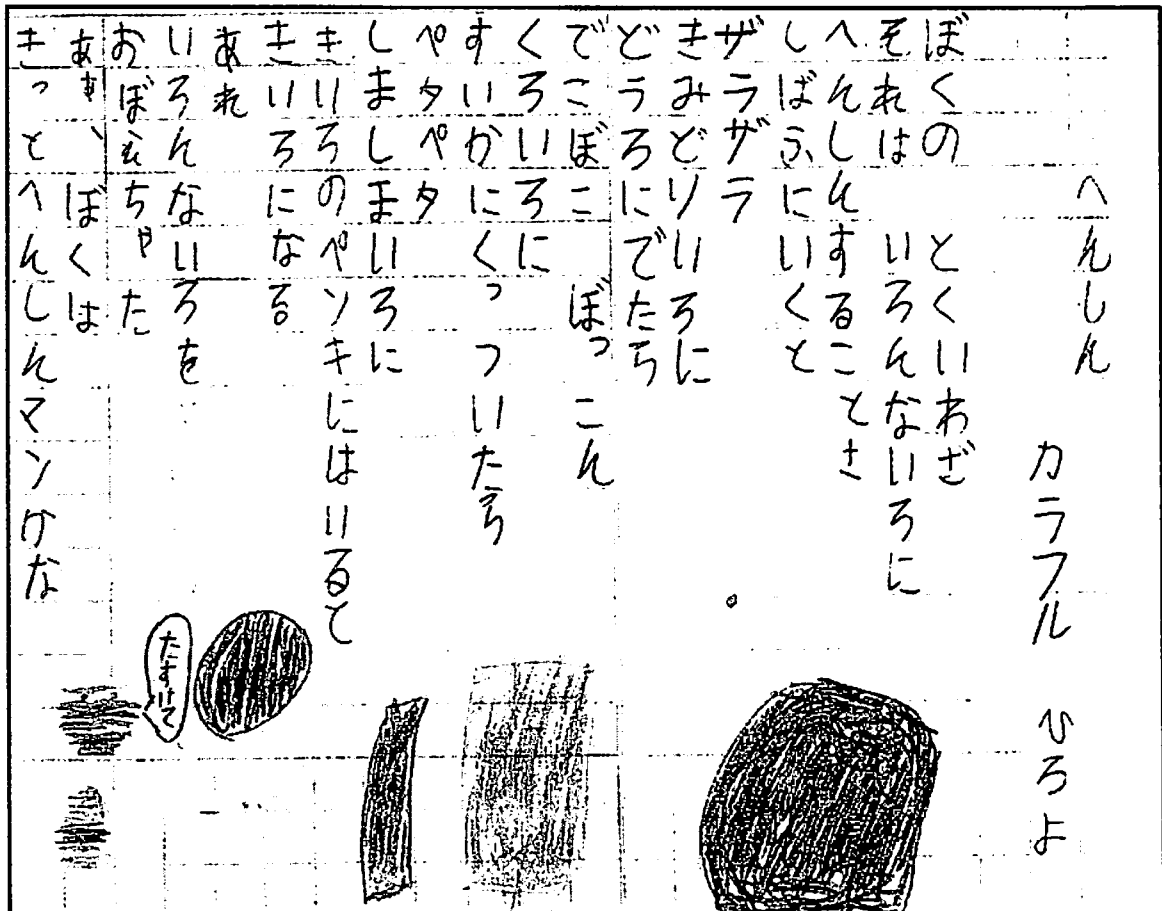
〔話し合いの様子〕

- B いろいろな色にへんしんするところがおもしろいね。でも、「光る言葉」が入っていないね。
- A 本当だ。どこに入れたらいいかな？
- B いろんなところに行くから、行ったところに「光る言葉」を入れてみたら？
- A それ、いいね。
- C じゃあ、最初はしばふのところだね。
- A 芝生は、ザラザラにする。
- C 道路はどうする？
- A うーん。道路は、でこぼこしている。
- B じゃあ、でこぼこ ぽっこんとかどう？
- A あっそれ、おもしろい！

※このグループでは、「光る言葉」が入っていないことに気づき、話し合いを進めていた。

と	色	れ	色	す	り	す	ぼ	
色	に	そ	の	い	色	る	く	ト
へ	な	の	や	か	に	こ	の	ウ
ん	っ	色	ン	に	な	と	と	フ
し	ち	を	キ	く	る	さ	く	フ
ん	ッ	あ	に	は	も	し	い	フ
マ	た	ぼ	入	つ	う	ば	あ	ウ
ン	の	え	る	い	ろ	ふ	ざ	ウ
り	あ	ち	と	た	に	に	は	レ
な	あ	ッ	黄	ろ	出	い	色	
ッ		て	色	み	た	く	に	ハ
		ぼ	ク	に	で	ろ	と	へ
		く	う	な	り	く	き	ん
		は	フ	る	色	ろ	み	し
		き	ル	あ	黄	色	ど	ん

〔Aの完成した作品〕



第3学年実践（作文）

児童数19人

1 単元名

強く心にのこったことを
～クラス文集を作ろう～

2 単元の目標

【関心・意欲・態度】

- ・身近な生活の中から興味を持った題材を選び、「光る言葉」を使って気持ちを表そうとする。
- ・進んで文集『ひざし』を読み、「光る言葉」を探そうとする。

【書くこと】

- ・自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成することができる。
- ・様子や気持ちが伝わるように、「光る言葉」を使ってよりよい表現に書き直したり、文章の敬体と常体との違いに注意しながら書いたりすることができる。
- ・友達が書いた構成メモや作文を読み合い、よりよい内容にするために意見を述べ合うことができる。

【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】

- ・「光る言葉」を集めることで、考えたことや思ったことなどを表すための言葉を増やすことができる。

3 指導計画 11時間扱い

次	学習内容と学習活動
第一 次 (4) 4月 中旬	○学習のゴールを知る。 ・文集『ひざし』を参考にして優れた表現や文章構成を学び、各種コンクールに出品するということを知る。 ○視写をした文集『ひざし』の作品で、文章構成や表現方法でよかったところ、作者が伝えたい気持ちを話し合う。 ・読み聞かせを聞く。 ・「始め－中－終わり」の文章構成をとらえる。 ・生き生きとした優れた表現「光る言葉」を探し、話し合う。 ・作者が伝えたい気持ちを話し合う。 ○「作文のたね（発見ノート）」の書き方を知る。（3時間） ・書き方を知る。 ・関心のあることなどから題材を決めて自分の考えが明確になるように「始め－中－終わり」を考えて書く。 ・これから常時記入し、袋の中にためていくことを知る。
常 時	○毎日5分間日記を書く。 ・日記を書くときに、掲示してある「光る言葉の木」を参考に表現豊かに書く。 ○文集『ひざし』の中から「光る言葉」を探す。

	・毎日、家庭学習で文集『ひざし』の作品を視写する。 ・文集ひざしコーナーにある文集ひざしを読み、優れた表現を見つけて付箋を貼り、「光る言葉の木」に掲示する。 ○何かを発見したり心が動いたりしたときに「作文のたね」に書き、袋にためていく。
第 二 次 (8)	○「作文のたね」の中から題材を選び、作文に書く。
6 月 中 旬	・書きためた「作文のたね」の中から、もっとも興味や関心が高いものを選ぶ。 ・「作文のたね」で書いた構成の段落について、班の中で意見を伝え合う。 ○構成をもとに、「始め」の段落の作文を書く。 ○構成をもとに、「中」の部分の作文を書く。(2時間) ○構成をもとに、「終わり」の部分の作文を書く。 ○モデル作文を表現豊かな作文にするために、掲示してある「光る言葉の木」を参考に手直しをする。 ○自分が書いた作文を「光る言葉」を使うという観点で手直しをする。(「中」の部分のみ) ○手直しした作文の消書をする。
第 三 次 (1)	○書き上げた作文を班や学級の中で発表する。 ○ひざしコンクールなどのコンクールに出品する。

事前の実態調査 【4月10日実施】

(仮説①「書こうとする力」に関連して)			
①	日記を書くことは好きですか。		
	好き 15人 ふつう 4人 好きではない 0人		
	【理由】		
	○好きな理由		
	ア・今日楽しかったことをノートに書いて未来へ残せるから。	7人	
	イ・先生が返事をくれるから。	5人	
	ウ・思い出して書くことが楽しいから。	2人	
	エ・「光る言葉」が書けるから。	1人	
	オ・字を書くのが好きだから。	1人	
	○好きではない理由		
	カ・書くことが思い浮かばないから。	2人	
	キ・たくさん書けないから。	1人	
②	メモを書いて作文を書くことは好きですか。		
	好き 9人 ふつう 9人 好きではない 1人		
	【理由】		
	○好きな理由		
	ア・メモを書いたら作文に書くことが簡単だから。	4人	
	イ・書くのが楽しいから。	2人	
	ウ・友達と読み合うことが楽しいから。	2人	
	エ・いっぱい思い出があり、いろんなことが書けるから。	2人	
	○好きではない理由		
	オ・題材が思い浮かばないことがあるから。	2人	
	カ・メモを書くのが上手にできないから。	1人	
	キ・書くことが大変だから。(難しい)	1人	

(仮説②「書くことができる力」に関連して)

- ③ 作文や日記を書く時にどんなことに気を付けていますか。
 ア・「 」や句読点を正しく書くこと イ・文字の間違い
 ウ・長い文章を書くこと エ・「光る言葉」を多く入れること
 オ・文字を丁寧に書くこと カ・会話文を多く入れること
 キ・文末(敬体・常体)
- ④ 作文を書いたら、誰に読んでほしいですか。
 ・先生 10人 ・家族 8人 ・友達 7人
- ⑤ 誕生日プレゼントをもらいました。嬉しい気持ちを書きましょう。
 ア・心がドキドキしました。 イ・わくわくしてきました。
 ウ・天国へ飛んで行ってしまいそうでした。 エ・大声を出したい気持ちでした。
 オ・心の中でおどりました。 カ・気持ちがピカーッとなりました。
 キ・まるで天国にいるようでした。 ク・心が笑いそうになりました。
 ケ・うれしくなりました。 コ・心がドクッとしました。
 サ・とてもハッピーでした。 シ・なんてやさしい人なんだ。
 ス・すごくむねがうきうきした。 セ・うきうきした。
 ソ・まるで、地球をもらったみたい。 ・無回答

上記の調査についての個々の児童の実態は、下記の表の通りである。

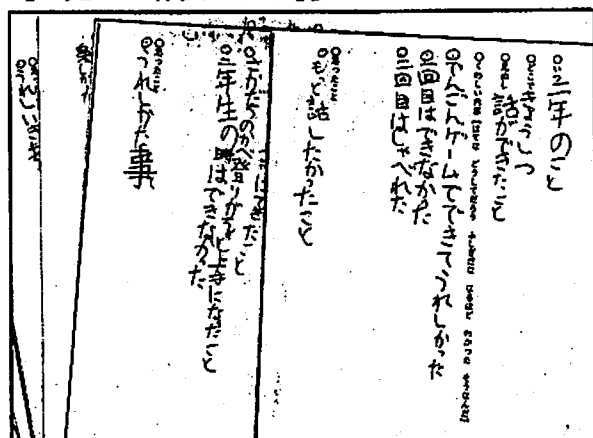
- ①日記を書きことは好きか。
 ②作文を書くことは好きか。
 ③作文や日記を書く時にどんなことに気を付けていますか。
 ④誕生日プレゼントをもらいました。嬉しい気持ちを書きましょう。
 (⑤～⑧は、日記による調査である。)
 ⑤5分間に書ける行数
 ⑥会話文があるか。
 ⑦段落(はじめ—中—終わり)で段落を変えて書きなさいという指示で、正しく書けているか。
 ⑧「光る言葉」を書いているか。

	①	理由	②	理由	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
A児	好き	エ	好き	ウ	キ	コ、シ	7	×	×	×
B児	好き	イ	ふつう	キ	ア	×	8	×	×	×
C児	好き	ア	ふつう	キ	ア	ア	7	×	×	×
D児	好き	ア	好き	イ	イ	ア	6	×	×	×
E児	ふつう	カ	好き	エ	ア	サ	5	×	○	×
F児	好き	ウ	ふつう	オ	ウ	イ	4	×	○	×
G児	ふつう		好きでない	キ	エ	ウ	7	×	○	×
H児	好き	ア	ふつう	ア	エ、オ	エ	5	×	○	×
I児	ふつう	キ	ふつう	キ	ア	×	5	×	×	×
J児	好き	ウ	好き	ア、イ	オ	×	5	×	○	×
K児	好き	イ	ふつう	キ	イ	オ、ウ、カ	5	×	○	×
L児	好き	イ	ふつう	オ	ウ、カ	キ	10	×	○	×
M児	好き	ア、イ	好き	ウ	エ	セ、ソ	10	×	○	×
N児	好き	ウ	ふつう	オ	ウ	×	8	×	×	×
O児	好き	ア	好き	イ	ア	ス	8	×	○	×
P児	好き	イ	ふつう	カ	ウ	ク	6	×	×	×
Q児	好き	ウ	好き	エ	オ	ア、イ	8	×	×	×
R児	好き	イ	好き	ア	イ	イ、ケ	8	×	×	×
S児	ふつう	オ、カ	好き	ア	ア	×	3	×	×	×

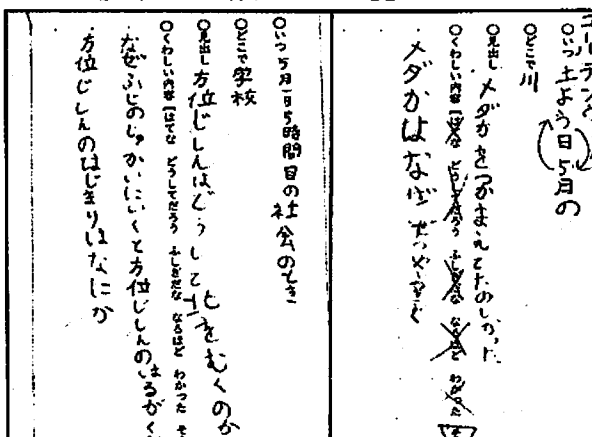
＜「作文のたね」を織にためる＞

学習前の実態調査で、「題材が思い浮かばない」と答えていたF児、N児の「作文のたね」二人とも7、8枚ためることができた。

〔N児の「作文のたね」〕



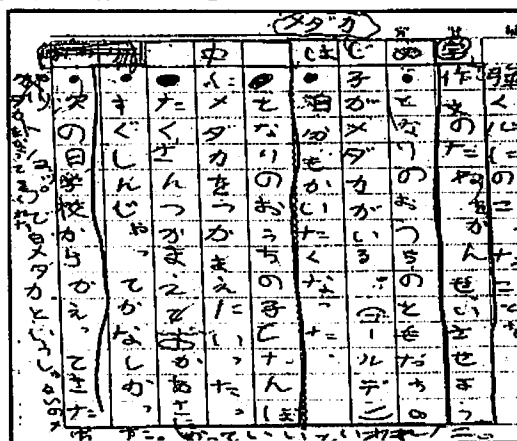
〔F 児の「作文のたね」〕



[F児の作文メモ]

＜「作文のたね」から題材を選ぶ＞

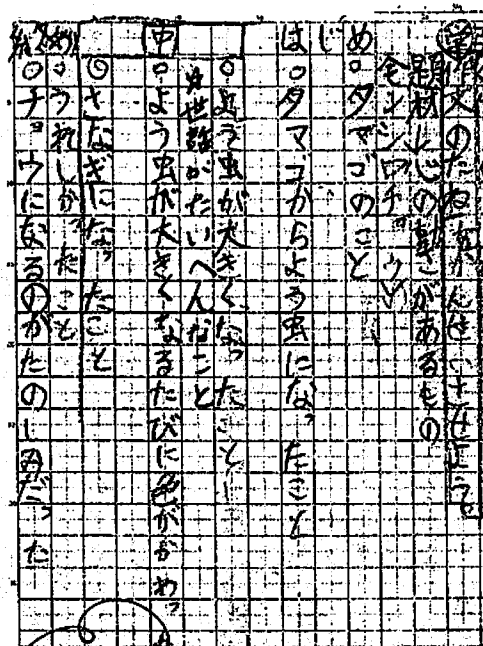
F児は、書き溜めた「作文のたね」の中から、自分に心が一番動いた題材を選び、構成メモを書くことができた。



[P児の作文メモ]

＜友だちに相談して構成メモを書く＞

P児は、学習前の調査で「構成メモを書くことが難しい」と答えていた。グループの友だちに相談し、伝えたいことが膨らむような構成メモを書くことができた。メモが書けたことが自信なり、次時から楽しそうに作文を書く姿が見られた。



＜光る言葉を探る。使う＞

4月から文集『ひざし』を読みながら「光る言葉」を探す活動を始めた。7月までに17人の児童が「光る言葉の木」に掲示をすることができたことが【資料1】からわかる。また、書く分量が増えたり、会話文を入れたり、「始め—中—終わり」を意識して書いたりすることができるようになってきた。

【資料1】

毎日の5分間日記における追跡調査と「光る言葉」さがし

⑤ 5分間に書ける行数（1行は22字）

⑥ 会話文があるか。

⑦ 区切り（はじめ～中～終わり）で区切りを覚えて書きなさいという指示で、正しく書けているか。

⑧ 「光る言葉」を書いているか。

★ 文集『ひざし』から、光る言葉を見つけた数

	⑤			⑦（始め・中・終わり）			⑧			★
	4/10	5/10	6/14	4/10	6/16	6/20	4/10	5/10	6/14	
A 児	7・×	12・○	29・○	×	○・区切りなし	○・○・○	×	×	×	8つ
B 児	8・×	8・×	6・×	×	区切りなし	○・○・○	×	×	×	なし
C 児	7・×	12・○	18・○	×	区切りなし	○・○・○	×	×	×	7つ
D 児	6・×	9・○	12・×	×	○・区切りなし	○・○・○	×	×	×	3つ
E 児	5・×	9・○	8・×	○	○・○・○	○・○・○	×	×	×	4つ
F 児	4・×	8・×	11・○	○	○・○・○	○・○・なし	×	×	×	5つ
G 児	7・×	10・×	16・○	○	○・○・○	○・○・○	×	×	×	9つ
H 児	5・×	6・×	11・○	○	○・○・○	○・○・○	×	×	×	2つ
I 児	5・×	8・×	7・×	×	区が少ない	区が少ない	×	×	×	1つ
J 児	5・×	7・×	13・○	○	○・○・○	○・○・区切りなし	×	×	○	3つ
K 児	8・×	9・○	12・○	○	○・○・○	○・○・○	×	×	×	5つ
L 児	10・×	12・○	42・○	○	○・○・○	○・○・○	×	×	×	4つ
M 児	10・×	8・○	19・○	○	○・○・○	○・○・○	×	×	○	5つ
N 児	8・×	15・○	12・○	×	区切りなし	区切りなし	×	×	×	1つ
O 児	8・×	11・○	12・×	○	○・○・○	○・○・○	×	×	×	5つ
P 児	6・×	6・×	18・○	×	○・区切りなし	○・○・○	×	×	○	3つ
Q 児	8・×	9・○	16・○	×	区切りなし	欠席	×	○	×	6つ
R 児	8・×	9・○	16・○	×	○・区切りなし	区切りなし・○	×	×	○	12
S 児	9・×	9・×	9・×	×	区が少ない	区が少ない	×	×	×	なし

【資料2】から、第二次の学習に入ってから15人の児童が、「光る言葉の木」や文集『ひざし』を参考にしながら「光る言葉」を作文に書くことができていることがわかる。

自分で作文を書く場面でも、教師のモデル文や、自分の作文を「光る言葉」を使って直す場面でも、教室に掲示した「光る言葉の木」や文集『ひざし』を参考にする姿がたくさん見られた。児童は、最初のうちは「光る言葉の木」や文集『ひざし』で見つけた言葉をそのまま使っていたが、次第にそれらを参考にしながら自分が伝えたいことに合わせて直して使ったり、最初から自分で考えたりするようになってきた。比喩表現や動作で様子や気持ちを表すことを楽しむ児童も多く見られた。このように使われ始めた「光る言葉」ではあるが、それが様子や気持ちを表すのに適した表現であるかどうかを吟味することまでは今回は求めず、まずは「光る言葉」を使う経験をさせた。今後このような活動を繰り返していけば、どのような言葉を選んで表現することが適切であるかを判断していけるようになっていくと考える。

文集『ひざし』から「光る言葉」を見つけて「葉」に書いている。



「光る言葉の木」を見て、自分の作文を直している。

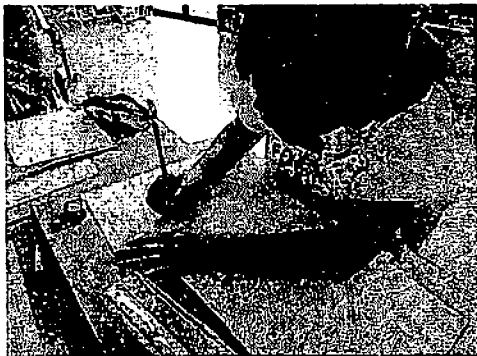


☆文集『ひざしで』見つけた「光る言葉」の例

- ・手に汗をじわっとかき、肩に力が入る。
- ・胸がドックドックなっていた。
- ・足がしびれたり、腕が重くなったりするくらい
- ・跳んだりはねたりしてよろこびました。
- ・心臓の音がどんどん速くなってきました。

＜友達との交流活動を積極的に行う＞

毎時間、小グループでの話し合い活動を行った。学習前の調査で、「構成メモを書くことが難しい」と応えていたP児は、グループの友達に相談しながら、起承転結を考えながら書き上げることができた。【資料3】の学習後の調査を見ると、全員が今回の作文の学習が楽しかったと応えている。「友達と相談し、直しながら書けたから」という理由を挙げている児童が16人もいることから、書いていく途中で相談タイムを設け、お互いの作文に対してアドバイスし合うことは、かなり楽しく有効な活動であったとわかる。これまでの作文の学習では、下書きを書き上げてから交流活動を行ってきたが、その段階でのアドバイスはなかなかしづらい。今回は、毎時間の交流活動なので、友達の作品を読み返し、「周りの様子はどうだった?」「お母さんはなんか言った?」などと様子が浮かばないことについてどんどん質問し、質問された児童はそれを書き加えていった。B児やI児、Q児、S児は、自分一人で書き進められないが、友達に質問してもらうことで書き進めることができ、とても楽しそうであった。その児童らは、今回の学習では友達にアドバイスすることはできなかったが、アドバイスされたことで作文の力は向上した。



構成メモに添って、一人で作文を書く。

第二次に入る前から文集『ひざし』からたくさんの「光る言葉」を探していた意欲的なR児は、第二次の作文に入ってから自分で「光る言葉」を使うことができていた。

「みんなもぼくもひっしでれんしゅうから、まわりがぼかっと、少し温くなりました。もっとがんばってみると、体育は、もっと温くなりました。さむかったぼくは、温くなりました。まるで、温泉に入った気持ちでした。」



時間内に書いたところまでを読み合い、様子や気持ちが伝わるかという視点でアドバイスをし合う。

※上の写真はI児。アドバイスをを受けて書き進めている。

「なんて言われたの?」

「周りにはなにがあった?」

「どんな気持ちだった?」

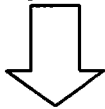
「その時どうしたの?」

など質問をされ、そのことを書き加えていた。

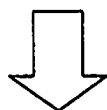
＜モデル文を使って、「光る言葉」を取り入れる練習をする。＞

教師の作ったモデル文を「光る言葉」を使って手直しする学習では、ほぼ全員が「光る言葉」に直すことができ、お互いの考えを合わせてグループの考えとしてまとめることができた。他のグループの考えと比べることも楽しそうであった。教室に掲示してある「光る言葉の木」や文集『ひざし』を参考にしていた。グループや全体での話し合いの中で、動作や様子で気持ちを表すと生き生きとした表現になることを学ぶことができた。

一人で考えて「光る言葉」に直す。



グループで話し合い、考えをまとめる。



班のシートを並べて比較し合い、3の1で1つにまとめる。



三番目に走るのは私でした。あやねちゃんからバトン
手にできました。いっしょけんめいに走りまわりました。
「今まで一番速いよ。すごーいよ。すごーいよ。」
と喜んでいました。うれしかったです。わたしは、れんくんはバトンを
わたしました。上手にわたせてうれしかったです。れんくんは足が速いの
で、どんどん進みました。みんながおうえんしてくれました。うれしか
ったです。れんくんがゴールをしました。先生が、
「五十五秒四。新記録。」
と言いました。
わたしは、きつとタイムが落ちたと思ってたので、びっくり
しました。とてもうれしかったです。またやりたいです。

と言っていました。Aチームは新記録でした。とてもよかったです。
した。はるるで、わたしは、わたしは、わたしは、わたしは、わたしは、
次にBチームがはかりました。みんなが、
「もっと手をふって、がんばれ。」
と言っていました。タイムが落ちて、とてもうれしかったです。
次にわたしたちははかりました。わたしは、きんちゃん、きんちゃん、
ロケット、つよし、れんくん、あやねちゃん、わたしは、わたしは、
しました。みんなは、みんなは、みんなは、みんなは、みんなは、
タイムをはかる時間になりました。
さいしょに、Aチームがタイムをはかりました。みんなが、
がんばれ。
言っていました。Aチームは新記録でした。とてもよかったです。Aチームのみんな、
えがおで、えがおで、えがおで、えがおで、えがおで、
次にBチームがはかりました。みんなが、

【追跡調査】

- ①構成メモを作る時間 … 内容、助言できていたか。
 ②作文を書く時間（始め） … 内容、光る言葉があるか、助言できていたか。
 ③作文を書く時間（中） … 内容、光る言葉があるか、助言できていたか。
 ④作文を書く時間（中） … 内容、光る言葉があるか、助言できていたか。
 ⑤作文を書く時間（終わり） … 内容、光る言葉があるか、助言できていたか。
 ※内容（必要な会話文ある、様子が詳しい、気持ちが伝わる）
 ⑥モデル作文について光る言葉に直す時間…いくつかの言葉を直せたか、話し合いができていたか。
 ⑦自分の作文について光る言葉に直す時間…いくつかの言葉を直せたか、助言できていたか。

紙幣児童。友達との関わりも苦手。話し合いはできないが、作文を見せていた。



B児	E児
①教師と共に	①○ ◎
②教師と共に	②△1つ ◎
③教師と共に	③△1つ ○
④一人で詳しく書けるようになった。	④○1つ ○
⑤○なし△	⑤○1つ ○
⑥2つ ○	⑥1つ ○
⑦2つ ○	⑦1つ ○

K児

①○ ◎
②○なし ◎
③○1つ ◎
④○2つ ◎
⑤○なし ○
⑥6つ ○
⑦2つ ○

友達のアドバイスにより、周りの様子を一人で詳しく書けるようになった。



J児	I児
①◎ ◎	①△ ◎
②○1つ ◎	②△なし ◎
③○1つ ◎	③△なし ◎
④○1つ ◎	④○なし ◎
⑤○2つ ◎	⑤△なし ◎
⑥2つ ◎	⑥2つ ◎
⑦2つ ◎	⑦なし ◎

H児

①○ ◎
③○なし ◎
③△なし ◎
④○なし ◎
⑤欠席(家庭で)
⑥2つ ◎
⑦1つ ◎

紙幣児童。話し合いはできないが、作文を見せていた。



N児	Q児
①○ △	①△ ◎
②○1つ △	②○2つ △
③○なし △	③△1つ △
④○なし △	④△なし △
⑤○なし △	⑤△1つ △
⑥なし	⑥4つ △
⑦なし	⑦なし △

M児

①○ ◎
②○なし ◎
③○2つ ◎
④○2つ ◎
⑤○3つ ◎
⑥3つ ◎
⑦3つ ◎

S児	G児
①教師と共に	①○ ◎
②教師と共に	②○なし ◎
③△なし △	③○なし ◎
④○なし △	④○1つ ◎
⑤○1つ △	⑤○1つ ◎
⑥1つ	⑥1つ ◎
⑦1つ	⑦1つ ◎

F児

①○ ◎
②○なし ◎
③○なし ◎
④○なし ◎
⑤○なし ◎
⑥なし
⑦1つ

中心場面を考えずに書いてしまう。



D児	R児
①○ ◎	①○ ◎
②○なし ◎	②○1つ ◎
③○1つ ◎	③○3つ ◎
④○2つ ◎	④○2つ ◎
⑤○1つ ◎	⑤○2つ ◎
⑥2つ ◎	⑥3つ ◎
⑦2つ ◎	⑦なし ◎

L児

①◎ ◎
②○1つ ◎
③○なし ◎
④○なし ◎
⑤○1つ ◎
⑥1つ ◎
⑦3つ ◎

友達がメモと合わせながらアドバイスをしてくれたので1時間目に修正。その後は問題なし。



P児	O児
①○ ◎	①○ ◎
②メモを無視◎	②○なし ◎
③○なし ◎	③○なし ◎
④○1つ ◎	④○なし ◎
⑤○1つ △	⑤○1つ ◎
⑥2つ	⑥2つ ◎
⑦1つ	⑦3つ ◎

A児	C児
①◎ △	①○ △
②○3つ ○	②○なし ◎
③○なし △	③○1つ △
④○なし △	④○1つ ○
⑤○なし ◎	⑤○1つ ○
⑥3つ	⑥1つ
⑦4つ	⑦2つ

【資料3】 【学習終了後 調査】【7月15日実施】

(仮説①「書くことする力」に関連して)

② 今回の作文の学習は楽しかったですか。

楽しかった 19名 ふつう 0名 楽しくない 0名

【理由】

○好きな理由(複数回答)

- ア・「作文のたね」を考えられた。 8名
 イ・文集『ひざし』を読んだから。 16名
 (ア)「作文のたね」が見つけれられた。 3名
 (イ) 光る言葉が見つけれられた。 7名
 (ウ) 作文の書き方のヒントがわかった。 3名
 (エ) 作文の中に「事件(山場)」があつておもしろかった。 1名
 (オ) いろいろな作文を読めた。 3名
 ウ・友達と相談し、直しながら書けたから。 16名
 エ・「光る言葉」を入れられたから。 10名
 オ・前より上手になったから。 16名
 (ア)「光る言葉」を入れられた。 9名
 (イ) 周りの様子なども入れて詳しく長い文章を書けた。 4名
 (ウ) 会話文の改行ができるようになった。 1名
 (エ) 会話文をたくさん書けた。 2名
 (オ)「中」の部分詳しく書けた。 1名
 (カ) メモの順番で書けた。 1名
 カ・教師の作ったモデル作文を直したから。 8名
 キ・思い出を思い出しながら書けるから。 5名
 ク・みんなに伝えたいことが伝えられるから。 5名

(仮説②「書くことができる力」に関連して)

③ 作文や日記を書く時にどんなことに気を付けたらよいですか。(複数回答)

- ア・会話文を長く書きすぎない。 2名
 イ・「 」や句読点、段落の改行を正しく処理すること 6名
 ウ・始め—中—終わりの段落に分けて書くこと 5名
 エ・会話文や気持ちを書くこと 3名
 オ・伝えたいことを考えて、長くしすぎないこと 1名
 カ・「光る言葉」を多く入れること 3名
 キ・書きたいことはあつたらすぐ書くこと 1名

調査についての個々の児童の実態は、下記の表の通りである。

② 今回の作文の学習は楽しかったですか。

③ 作文や日記を書く時にどんなことに気を付けたらよいですか。

	②	理由	イの具体的な内容	オの具体的な内容	③
A児	楽しかった	ア、イ、ウ、エ、オ	(ア)	(ア)	ア
B児	楽しかった	オ		(イ)	無回答
C児	楽しかった	イ、ウ、エ、オ	(イ)	(ウ)	イ
D児	楽しかった	イ、ウ、オ	(オ)	(ア)	イ
E児	楽しかった	ア、イ、ウ、オ	(イ)	(イ)	ウ
F児	楽しかった	ア、イ、ウ、オ	(ア)	(エ)	エ
G児	楽しかった	ア、イ、ウ、エ、オ	(イ)	(オ)	カ
H児	楽しかった	イ、ウ、オ	(ウ)	(カ)	オ
I児	楽しかった	イ、ウ、オ	(エ)	(イ)	キ
J児	楽しかった	イ、ウ	(ウ)		カ
K児	楽しかった	ア、イ、ウ、エ、オ	(イ)	(ア)	ウ
L児	楽しかった	イ、オ	(ア)	(ア)	イ
M児	楽しかった	ウ、オ		(ア)(イ)	イ
N児	楽しかった	ア、イ、ウ、エ	(イ)		ウ
O児	楽しかった	イ、エ、オ	(イ)	(ア)	イ
P児	楽しかった	ア、イ、ウ、エ、オ	(イ)	(ア)(エ)	エ、カ
Q児	楽しかった	ア、イ、ウ、エ、オ	(オ)	(ア)	ア
R児	楽しかった	イ、ウ、エ、オ	(ウ)	(ア)	イ、エ
S児	楽しかった	イ	(オ)		無回答

第4学年実践（作文）

児童数21人

1 単元名

心の動きがわかるように
～1学期の学級文集を作ろう～

2 単元の目標

【関心・意欲・態度】

・自分の心の動きを見つめ、意欲的に表現し、作文に書こうとしている。

【書くこと】

・伝えたいことの中心を明確にし、必要に応じて理由や事例を挙げて作文を書くことができる。

【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】

・句読点を適切に打ち、会話文を取り入れたり必要な箇所で行ったりして作文を書くことができる。

3 指導計画 10時間扱い 6月下旬から7月中旬にかけて実施

次	学習内容と学習活動
第一 次 (1)	○学習の見通しをもち、身近なできごとの中から心が動いた体験を選び、題材を設定する。 ・「学習の進め方」を読んで、学習の流れと目的を知り、見通しをもつ。 ・「妹が歩けたよ」の原文を読み、作者の心の動きを読み取る。 ・身近なできごとの中から、心が動いた場面を発表し合い、題材を考える。
常 時	○毎日「5分間作文」にとりくむ。 ○毎週、宿題で「作文・詩」を書く。また、作品が載っている学級だよりを音読する。 ○音読カードに、読んだ作品の一言感想を記入する。 ○「光る言葉の木」により表現や「光る言葉」を集める活動にとりくむ。
第二 次 (8)	○教材文を音読し、構成や書かれている内容を理解し、表現の工夫を知る。 ・「妹が歩けたよ」を音読する。 ・「作品分析ワークシート①」を使い、段落と「始め－中－終わり」に分ける。 ・段落ごとの内容や、作者の心の動きがわかるように一文でまとめる。 ・「光る言葉」について、グループで話し合い、意見交換する。 ○文集『ひざし』の作品を音読し、構成や書かれている内容を理解し、表現の工夫を知る。 ・「作品分析ワークシート②」を使い、段落や「始め－中－終わり」に分ける。 ○題材を選び、伝えたいことを中心に「情報カード」を書く。 ・心が動いた場面やできごとについて、1つの情報につき1枚の「情報カード」に書き出す。 ・伝えたいことの中心と関連するできごとを「情報カード」に書き出す。 赤伝えたいことの中心 黄中心に関連するできごと 青まとめとなる自分の気持ち ・「情報カード」を10枚程度作る。 ○「情報カード」をもとに「組み立て表」を作る。グループで書く内容を説明し合い、「組み立て表」を完成させる。

	・「情報カード」を、作品の構成を考えて「始め—中—終わり」の順に並び替える。 ・構成をもとに「組み立て表」に文章を書き写す。 ・「組み立て表」をもとにグループで内容を説明し合い、意見交換を行い、「組み立て表」や「情報カード」を見直し、修正する。 ○完成した「組み立て表」をもとに、原稿用紙に文章を書く。(2時間) ・「組み立て表」の構成をもとに、話の筋に沿って文章化する。 ・「光る言葉の木」などを参考に、表現方法を工夫する。 ○書いた文章を自分で読み返し、また、友だちと読み合い意見交換する。その後、推敲する。 ・文章を音読し、内容や表現におかしなところがないか確認する。 ・友だちと文章を読み合い、感想や表現の良さなどについて意見交換する。 ・自分の心の動きについて、よりよい表現を考え、推敲する。 ○推敲した文章を清書する。 ・推敲した文章を、文集用の原稿用紙に清書する。
第三次 (1)	○互いに作品を読み合い、内容の感想や、書き方の工夫について発表し合う。 ・書いた作文をグループで交換して読み合い、互いの文章のよさや工夫を見つける。 ・学習を振り返り、作文を書いた感想や気づいたことを「評価カード」に書く。

<ひざしの分析(文章構成を考える)ワークシート>

○教科書教材になっている、文集『ひざし』の原文を使って、長文の作品構成を分析した。

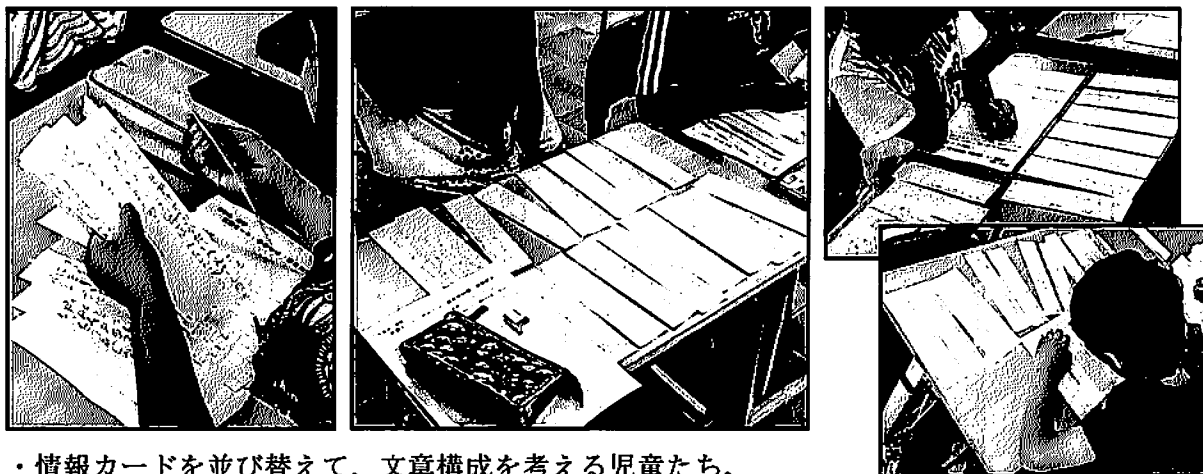
- ・①何段落で書かれているか。②段落ごとの主な内容は何か。③伝えたいことの中心はどこか。(心が動いた場面)④光る言葉はあるか。についてまとめた。共通教材の他に、文集『ひざし』から作品を選んでの分析や、「光る言葉」集めも行い、長文を書く意欲を高めていった

四年生 国語 文集「ひざし」の作品構成を考えよう	
わかったことと気付いたこと	妹がくれたよ 氏名

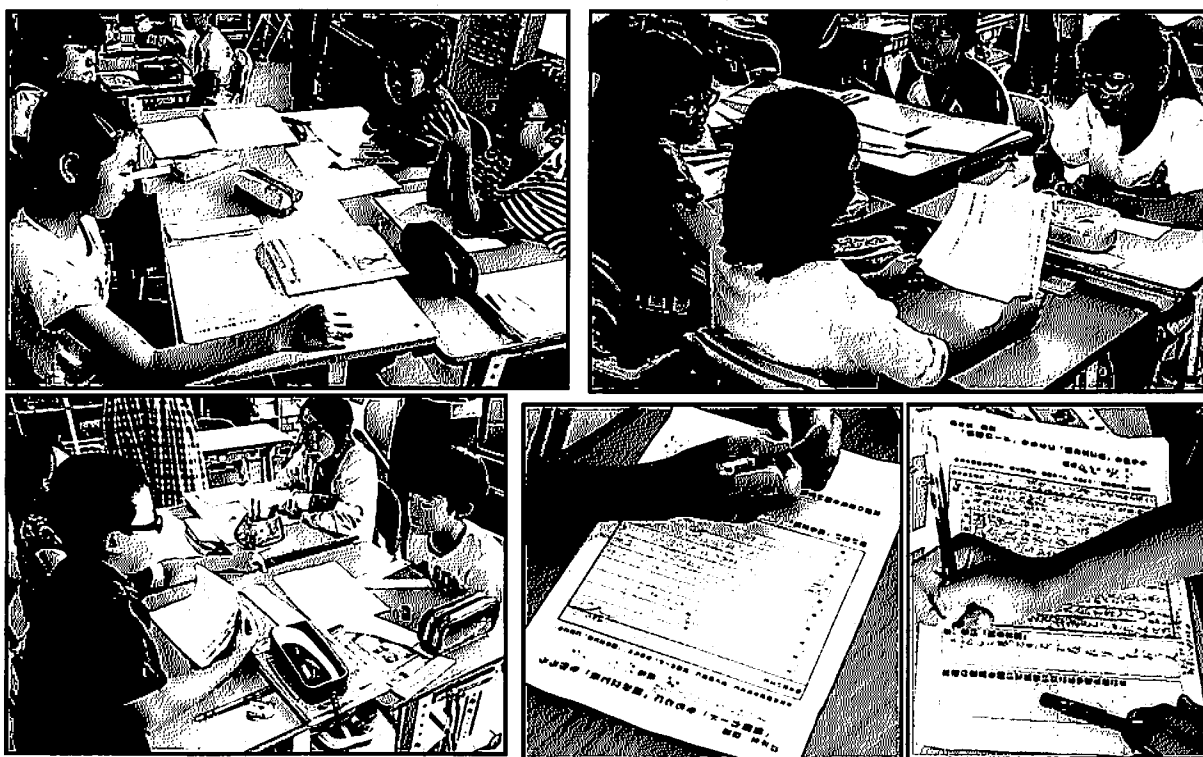
教科書教材の原文(ワークシート)の他にも、文集『ひざし』の蔵書が50冊程あったことで、児童はより多くの文集『ひざし』の作品に親しむことができた。

＜情報カード・組み立て表・意見交換＞（情報カードは提案資料P.6参照）

○情報カードを作成後、組み立て表に記入した。友だちと意見交換を行い、感想やアドバイスを伝え合った。意見交換を受けて、組み立て表の修正を行い、よりよい作文をめざした。



・情報カードを並び替えて、文章構成を考える児童たち。



〔グループでの意見交換〕

A「伝えたいことが80m走なのに、なんでいろいろ書きちゃうの？」

B「全部書きちゃったなら、優勝して嬉しかったことにすれば」

C「まず、情報カードの作り方があっていないんだよ」

B「80m走で何を頑張ったかとか、前の人を抜かせなくて悔しかったとか、そういう感じのことを書けばいいんだよ」

このように、意見交換では活発に意見をやりとりする児童の姿が見られた。学習内容を正しく共有していくアドバイスが、児童の考えの形成に役立てられた。また、友だちから客観的な意見を聞くことで、相手意識をもって自分の組み立て表を見直すことができた。よりよく自分の伝えたいことを書くにはどこを修正すればよいかに気づき、文章構成を工夫したり「光る言葉」を使って書き改めたりすることができた。

〔児童の組み立て表〕

[illegible]

「始め—中—終わり」を意識し、「光る言葉」の使い方を考えた「組み立て表」ができた。

＜原稿用紙＞

- 学級文集の1ページ分に収まる原稿用紙を使用し、下書きを行った。完成後は、①自分で読み返す。②友だちに読んでもらう。③担任のチェックを受ける。④保護者に音読を聞いてもらう。という過程を経て、清書を行った。多くの目で見ること、完成度を高めていった。

[児童の原稿用紙（下書き）]

[illegible]

- ・推敲や加筆修正を行って、真っ赤になった原稿用紙。それでも児童は、よりよい作文を書きたい、文集『ひざし』に応募したいという意欲をもってとりくむことができた。